「死即是生への旅」

―尊厳死へのわが思い―

平成十七年九月

千足隆昭

私は現在七十三才です。尊厳死を知った動機は二十五年前、父が神戸のカトリック系病院で大往生したからです。当時その言葉も日本では知られなかったホスピスケアでした。今迄の暗く恐ろしい死のイメージが一変しました。父の最期で最高の贈物に大変感謝しています。

其処から私の安心立命への旅が始まりました。満足して死ぬには人生思い残す事無く生きる事だと気付き、五十歳代に今後の人生設計をしました。生涯の起承転結をハッキリさせよう、そこで定年後の転を起承期にお世話になった社会へ感謝と喜捨でお返しの喜謝期に、次の結は遊行期としました。六十歳退職と同時に尊厳死協会と笑い学会へ入り死と生をライフテーマにしました。尊厳死が出来る様、生を笑いで充実させたいと考えました。

尊厳死協会へ入ると機関誌・講演会から死に対する勇気が湧きます。また以前拙稿を載せて頂いた際、ベテラン会員諸兄から含蓄のある具

体的ご助言を賜り、今では尊厳死＝大往生と言う心境になりました。

生き方としては、第三の喜謝期は図らずもバブル崩壊初年に遭遇し、新しい時代の新しい社会創りに広く貢献出来ました。お陰で望外の価値ある現役を体験しました。昨年元旦七十二才の年男を期に仕事を引退し、第四の遊行期に入りました。現在、自分で手創り出来る「本当の人生」を味わっています。

尊厳死はどう生きるかを絶えず考え行動する源泉であり、病気になっても元気を与え、思い残す事無く死を迎える希望を運んで呉れます。昨年、関西支部の講演で「笑って大往生」の奥義を戴き、心から喜んでいます。此れからは笑いと尊厳死をじっくり熟成させながら朗娯の与生を自在に生きたいと願っています。今後のご指導をお願い申上げます。

無一物中無盡蔵　有花有月有樓臺　禅語